

『栄花物語』における宮廷女性の死の考察

——死の様相と哀傷歌——

白 濱 路 子

序章

『栄花物語』は平安時代中期に成立した歴史物語である。『日本古典文学大辞典』には、以下のように記載されている。

四十卷。歴史物語。〈中略〉「栄花物語」という書名は、藤原道長の栄華を主として描いていることによる。仮名書き国史の通称によるものであり、全巻を通じて巻ごとに優美な巻名が付けられている。作者については、正編三十巻と続編十巻とにわかれ、続編もまた、巻三十七と巻三十八の間で一線が画され、それぞれ別の作者により成立年代を異にして順次正編に書きつがれていったものと考えられる。作者と

して赤染衛門が有力である。本書の内容が宮廷事情と道長の周辺に詳しく、〈中略〉国史編集とも密接な関係のあった大江家に嫁して、匡衡の妻となったことから正編の作者としては最も妥当性に富んでいるといえよう。また続編第一部の作者としては、出羽弁に関する記事や詠歌が多く見られることから弁が有力視されている。第二部の作者としては周防内侍説があるが確証はない。〈中略〉正編の成立は、長元年間（一〇二八—一〇三七）と推定され、続編全体の成立は、寛治六年（一〇九二）二月以後間もないころであろう。〈中略〉本書は天皇は宇多に、藤原氏は基経に起筆し、堀河天皇の時代にいたる十五代およそ二百年の宮廷を中心とする貴族社会の歴史

を編年体式仮名文で物語風に叙述し、正編は宇多天皇から後一条天皇の万寿五年二月までおよそ一四〇年間、続編は後一条天皇長元三年（一〇三〇）十二月から堀河天皇の寛治六年二月までおよそ六十年間である。（中略）史書としては「六国史」もしくは、未完成に終わった『新国史』のあとを継ぐ意図を持っていたものとみられ、史書としては本書独自の記事も見られる反面、史実を歪曲したところも多く、正確な編年体史とはいいたくない。「六国史」の年代的な記述を受け継いだ歴史的なものと、場面を具体的に描く物語的手法と、両者が混在して、全体としては物語風歴史と呼ぶのが至当であろう（後略¹）。

『栄花物語』はその名称のごとく、藤原北家九条流の藤原道長の栄華を中心に、宮廷、貴族に関する出来事を記している。この物語の性格を加納重文氏は、「作者が生活するところの道長世界のもろもろの出来事を述べつつっていくだけでそれが十分に道長物語になっているとの、樂觀的な物語意識であり、したがってそれは必ずしもめでたく華やかな話柄のみを求めない」ことを指摘されている²。そのように、『栄花物語』は必ずしも道長の栄華を描くのみではない。つまり、「道長物語」は道長

周辺のみに限らず、その圏外にある者たちのことをも含めて成立している。また福長進氏によれば、『栄花物語』は『源氏物語』の影響のもとに誕生したものであり、『栄花物語』が後宮を叙述の主対象に据えていることは、『源氏物語』が後宮世界を軸にして物語を描いていることを踏まえて構成されたものと考えられている³。

ところで、『栄花物語』には、少なからぬ量の記事を費やして死というものが描かれている。その分量は記事全体の約三分の一に及ぶものであるとされている⁴。とくに女性の死の場面は、発病や出産から死に至る様子や、人々の悲嘆、葬送の描写などが、男性の死の場面と比較するとより詳細に描かれている。

本論文では『栄花物語』に描かれたそのような女性の死の記事に着目し論じていく。第一章では女性らの死の全体像を表にして表した。第二章、第三章ではそれらの女性の死の記事がどのような意図で描かれ、どのような役割を持ったのか、とりわけ記事の多い長保および万寿年間の女性たちの死を取り上げ、『栄花物語』における女性の死について考えていきたい。また第四章では、女性らの死の際によまれた『栄花物語』の哀傷歌について『源氏物語』との関わりから検討していきたい。

なお、本文の引用は『新編日本古典文学全集三二』三
三『栄花物語』（山中裕ほか校注・訳、小学館、一九九五年）
および『新編日本古典文学全集二〇』二五『源氏物語』
（阿部秋生ほか校注・訳、小学館、一九九四～九八年）によ
る。

第一章 『栄花物語』における女性の死

『栄花物語』において女性の死はどれほど描かれている
のだろうか。本章では、『栄花物語』に描かれた女性
の死を表にして記していく。

『栄花物語』正続合わせた四十巻には、三十九人の女
性の死が描かれている。これらの女性の死について、巻
名、死去した女性の名称、没年、没年齢、死因、どの部
分に記述があるのかを『新編日本古典文学全集 栄花物

語①～③』の頁数を記載し、その記事の分量、哀傷歌の
有無の項目ごとに記載しまとめたのが次表である。

女性の名称は、誰の配偶者であったか、誰の女なのか
を記し、おおむねは本文に記されている呼称を用いた。
没年については史実とは異なる場合もあるが、『栄花物
語』の本文中に記載された年月日にしたがった。また没
年齢についても、本文中に記されているものを記載した。
死因については、〈病死…○（懷妊中の病死…*）、出産に
よる死…□、物の怪・霊による死…△、その他…●、不
明…?〉という記号を用いて表した。哀傷歌については、
その人物の死を悼む哀傷歌の数を後述する『和歌文学大
辞典』の「哀傷歌」の記述の定義に基づいて計上した。
哀傷歌が見られない場合には×をつけてあらわした。

巻名		人物		没年	没年齢	死因	頁数	哀傷歌
巻第一「月の宴」		村上天皇中宮	藤原安子	応和四年（九六四）四月二十九日		△□	①（四三頁一行～四八頁二三行）五頁	×
		円融天皇中宮	藤原皇子	天元二年（九七九）六月二日		○	①（一〇〇頁五行～一〇二頁二行）一三行	×
巻第二「花山たづぬる中納言」		円融天皇妃	尊子内親王	天元四年（九八一）		●	①（一〇六頁六行～一〇六頁一〇行）五行	×
						?	①（二〇七頁一〇行～一一〇	

卷第五「浦々の別」	冷泉院女御 藤原超子	天元五年（九八二）正月		△	頁一四行三頁	×
	花山天皇女御 藤原低子	寛和元年（九八五）		* ○	①〈一二七頁八行一三二頁二行四頁	×
卷第六「かかやく藤壺」	藤原道隆室 高階貴子	長徳二年（九九六）十月二十日余り		○	①〈二六七頁一〇行二六八頁一〇行〉一頁	一首
	太皇太后（冷泉天皇中宮）昌子内親王	長保元年（九九九）十二月一日		?	①〈三四四頁六行一〇行〉五行	×
卷第七「とりべ野」	一条天皇皇后 藤原定子	長保二年（一〇〇〇）十二月十五日	二十五歳	△ □	①〈三三五頁七行三三二頁六行七頁	七首
	東宮居貞親王尚侍 藤原綏子	長保三年（一〇〇一）春		○	①〈三三三頁二行三三四頁三行〉七行	一首
	藤原道綱室 源雅信女	長保三年夏か		□	①〈三三五頁三行三三七頁四行二頁	×
	東三条院（円融天皇女御）藤原詮子	長保三年十二月二十二日		○	①〈三五三頁九行三五六頁七行三頁	×
	東宮居貞親王女御 藤原原子	長保四年（一〇〇二）八月二十余日		○	①〈三五八頁一行三五九頁九行二頁	×
	一条天皇御匣殿 藤原道隆女	寛弘元年（一〇〇四）	十七、八歳	○	①〈三六八頁一〇行三七〇頁七行〉三頁	×
卷第八「はつはな」	一条天皇第二皇女 媛子内親王	寛弘五年（一〇〇八）	九歳	○	①〈三九五頁六行三九六頁九行一頁	×
	源雅信室 藤原穆子	長和五年（一〇一六）		○	②〈七五頁六行八三頁一行八頁	一首
卷第十二「たまのむらぎく」	太皇太后（円融天皇皇后）藤原遵子	寛仁元年（一〇一七）		○	②〈九二頁三行六行〉四行	×
	小一条院女御 藤原延子	寛仁三年（一〇一九）四月		○	②〈二〇五頁一行二二一頁一四行〉六頁	×
卷第十六「もとのしづく」	藤原長家室 藤原行成女	治安元年（一〇二二）		○	②〈二二六頁三行二二二頁一五行〉五頁	四首
	藤原公任女	治安二年（一〇二三）三		○	②〈二五三頁六行二五五頁	七首

卷第二十一「後くゐの大將」	藤原教通室 藤原公任女	万寿元年（一〇二四）十二月	二十四歳	△□	②〈三七八頁二行～三八九頁一〇行〉一一頁	三行二頁	三首
卷第二十五「みねの月」	三条天皇皇后 藤原城子	万寿二年（一〇二五）三月		○	②〈四六五頁一行～四七三頁一三行〉八頁		五首
	小一条院女御 藤原寛子	万寿二年七月八日		△○	②〈四八〇頁六行～四九〇頁三行〉一一頁		三首
卷第二十六「楚王のゆめ」	東宮敦良親王尚侍 藤原嬉子	万寿二年八月五日		△□	②〈五〇三頁一二行～五三一頁二行〉二九頁		七首
	小左衛門	万寿二年八月五日		?	②〈五二五頁九行～五二六頁二行〉九行		×
卷第二十七「ころものたま」	藤原長家室 藤原齊信女	万寿二年		△□	③〈二三頁三行～三二頁二行〉九頁		七首
	小式部内侍 橘道貞女	万寿二年		□	③〈三八頁六行～三九頁八行〉一頁		二首
	源顕基室 藤原実成女	万寿二年十二月		○	③〈三九頁九行～四〇頁三行〉一〇行		×
	藤原公信室 藤原正光女	万寿三年（一〇二六）正月二十日過ぎ		?	③〈六五頁七行～六六頁一〇行〉一頁		三首
卷第二十九「たまのかざり」	皇太后（二条天皇中宮）藤原妍子	万寿四年（一〇二七）九月十四日		△○	③〈二七頁一〇行～一四〇頁一〇行〉一四頁		一四首
卷第三十三「きるはわびしとなげく女房」	後一条天皇中宮 藤原威子	長元九年（一〇三六）九月六日		○	③〈二七四頁二行～二八〇頁一二行〉八頁		二一首
卷第三十四「暮まつほし」	後朱雀天皇中宮 姫子女王	長暦三年（一〇三九）九月		□	③〈三〇三頁二三行～三〇四頁一四行〉一頁		五首
卷第三十六「根あはせ」	藤原頼通室 源祇子	天喜元年（一〇五三）五月		○	③〈三六九頁一四行～三七〇頁七行〉		×
	藤原道長室 源倫子	天喜元年夏		?	③〈三七一頁一四行～三七二頁三行〉五行		×
卷第三十七「けぶりの後」	東宮尊仁親王女御 藤原茂子	康平五年（一〇六二）		○	③〈四〇六頁一〇行～四〇七頁二行〉六行		×

卷第三十九「布引の滝」					上東門院（二条天皇中宮）藤原彰子	承保元年（一〇七四）十月三日	八十七歳	○	③（四七二頁九行～四七五頁一四行）三頁	×
白河天皇中宮 藤原賢子					應徳元年（一〇八四）九月二十二日			○	③（五一二頁八行～五一三頁八行）一頁	二首
源師房室 藤原尊子					應徳三年（一〇八六）	八十歳		?	③（五一八頁二行～七行）五	×
藤原頼通室 隆姫女王					寛治元年（一〇八七）	九十歳ばかり		?	③（五一八頁二行～一三行）三行	×
小一条院女御 瑠璃女御					寛治三年（一〇八九）			?	③（五二六頁一〇行～一二行）三行	×

卷第四十「紫野」

※没年については本文中のものをを用いており、史実とは異なる場合がある。

※人物名はおおむね本文による。

※哀傷歌は表に記した頁内に含まれていないものも計数した。

※死因については以下の記号を用いて表した。

病死○（懷妊中の病死＊） 二十二人（二人）

出産による死 八人

物の怪・霊△ 八人

その他● 一人

不明？ 六人

右の表からわかるように、『栄花物語』にその死が描かれる女性の内訳は、天皇および東宮の後妃が二十三人、臣下の配偶者が十二人、女房が二人、独身の内親王が一人、臣下の女が一人である。人数的にみれば后妃が半数以上を占めており、その死を中心に描かれていることがわかる。

またそれらの死の記述は、長保および万寿年間の記事に集中していることがわかる。長保年間には昌子内親王、藤原定子、藤原綏子、藤原道綱室（源雅信女）、藤原詮子、藤原原子の計六人の死が描かれている。万寿年間には藤原教通室（藤原公任女）、藤原成子、藤原寛子、藤原嬉子、小左衛門、藤原長家室（藤原齊信女）、小式部内侍、源顕

基室（藤原実成女）、藤原公信室（藤原正光女）、藤原妍子の計十人も女性の死が描かれている。この長保・万寿年間に死去した女性の数は、他の時期に比べて突出して多い。

次に死因についてであるが、死去した女性の死因は病死が二十二人であり最も多い。その次に多いのが出産による死および物の怪・霊によるものが八人ずつである。なお物の怪・霊の場合、すべてがほかの死因と重なっている。また、死因が不明のものは六人である。

記事の分量は、正編に描かれた女性の死の方が続編に比べて多くの頁数を用いて記されている。藤原嬉子が最も多く二九頁であり、嬉子の死に関する記事は巻第二十六「楚王のゆめ」のほぼ全体を占めるほどである。二番目に多いのが藤原妍子の一四頁である。これは近親者の悲嘆だけでなく、女房たちの数多くの哀傷歌が記載されているからである。三番目に多い人物が教通室（公任女）および藤原寛子で一頁である。教通室の死についての記事は巻第二十一「後くゐの大將」の全体の七割を占めている。また寛子の死が描かれている巻第二十五「みねの月」には寛子のみならず藤原城子の死も八頁の分量で描かれており、この巻もほぼ全体を二人の死の記事に費

やしている。一方で続編では、総じてその死の記述が短く一頁に至らず数行で終わるものが多い。一頁をこえる記事は、藤原威子が八頁、藤原彰子が三頁、姫子女王および藤原賢子が各一頁と、以上の四人のみである。

女性の死の際に詠まれた哀傷歌は全四十巻において九一首が存在する。最も数が多いのは威子に二一首で、次いで多いのが藤原妍子で一四首である。そのほか多くの哀傷歌がよまれているのは、藤原嬉子に七首、藤原定子に七首、藤原公任女に七首、藤原長家室（藤原齊信女）に七首などである。

第二章 長保年間と女性の死

『栄花物語』において長保年間の記事は、巻第六「かかやく藤壺」から巻第八「はつはな」の冒頭部分にいたるまでの三巻に描かれている。この長保年間では、巻第六「かかやく藤壺」に昌子内親王の、巻第七「とりべ野」に藤原定子、藤原綏子、藤原道綱室（源雅信女）、藤原詮子、藤原原子の計六人の女性の死が記されている。これらの長保年間の女性の死は『栄花物語』において万寿年間の十人に次いで多い。

以下において、『栄花物語』の長保年間の中心人物と

みなされる定子およびその周辺の女性の死の描写を詳しく見ていく。それらの死の描写によって『栄花物語』は何を描こうとしたのだろうか。本章では、長保年間の女性の死の描写が『栄花物語』においてどのような意図をもって描かれたのかということを検討していく。

第一節 長保年間の女性の死——藤原定子の死——

長保年間の記事の中心となるのは、一条天皇の皇后藤原定子の死に関する記述である。巻第七「とりべ野」の巻名は、この定子と東三条院藤原詮子が薨去し、鳥辺野において葬送が行われたことによるものである。

藤原定子は、摂関家の嫡男道隆と円融天皇の御代に掌侍を務めた高階貴子との間に長女として産まれる。后がねとして育てられ、正暦元年（九九〇）二月に一条天皇に入内し女御となり、同年六月一日に立后し中宮を号する。また妹の原子も父道隆が関白となったのち、東宮に入内し、道隆の一族は権勢を誇っていた。

しかし巻第四「みはてぬゆめ」において父道隆が病に倒れる。病は悪化し、道隆は長徳元年（九九五）四月十日に死去する。伊周は父道隆が病の間のみの内覧の宣旨

であったので、道隆の弟である道兼が跡を継ぎ関白となるも、道兼は流行り病に倒れ死去する。そして道隆の男である伊周に内覧の宣旨は下らず、道隆、道兼の弟道長に内覧の宣旨が下り、これ以降道長が政権を握ることになった。

定子の兄弟である伊周と隆家が、花山院に対し矢を射る事件——長徳の変を起こし、ここから中関白家は凋落の一途をたどる。二人は処罰を待つ身となり、巻第五「浦々の別」において邸は検非違使によって包囲され、配流の宣旨が下った。その後一条天皇のもとに、中納言藤原顕光女元子、中納言藤原公季女義子、故関白道兼女尊子が入内し女御となり、さらには巻第六「かかやく藤壺」において道長女彰子が入内し立后する。同じ年に定子は第一皇子敦康親王を出産するも、その生母でありながら不安定な立場に立たされ、その後、第二皇女嬢子内親王を出産後薨去する。

そのような定子の死は巻第七「とりべ野」において以下のように描かれている。

御物の怪などいとかしがましういふほどに、長保二年十二月十五日の夜になりぬ。《中略》女におはしますを口惜しけれど、さはれ平らかにおはしますを

勝ることなく思ひて、今は後の御事になりぬ。額をつき、騒ぎ、よろづに御誦経とり出でさせたまふに、御湯などまゐらするにきこしめし入るるやうにもあらねば、皆人あわてまどふをかしこきことにするほどに、いと久しうなりぬれば、なほいといとおぼつかなし。「御殿油近う持て来」とて、帥殿（＝伊周）御顔を見たてまつりたまふに、むげになき御気色なり。あさましくてかい探りたてまつりたまへば、やがて冷えさせたまひにけり。（①三三五頁七行）

物の怪を移された人たちが騒ぎ立てるなか、長保二年（一〇〇〇）十二月十五日の夜、定子は皇女（嬪子内親王）を産む。皆が皇子ではなく皇女であったことを残念に思うが、定子の後産のことが気がかりである。騒がしく折り立て、薬湯なども差し上げるが、召し上がる様子もない。兄である伊周が定子の顔を確認するともうすでに冷たくなつており薨去していた様子がここに描かれている。伊周が「帥殿は抱きたてまつらせたまひて、声も惜しまず泣きたまふ。（①三三六頁六行）」と遺体を抱き声も惜しまずに泣く様子や、弟隆家が「いかで御供に参りなん（①三三六頁二行）」と定子の死を嘆く様子からわかるように、この兄弟らの悲嘆を哀れ深く描いている。

また、「この殿ばらの御をりに（＝伊周・隆家配流の折に）宮の内の人の涙は尽き果てにしかど、残り多かるものなりけりと見えたり。（①三三六頁一四行）」とあるように、定子の御所では人々が涙を流し嘆き悲しむさまが表現されており、定子の死が人々にとってこの上なく悲嘆すべきこととして描かれている。

次は一条天皇の心情である。

内（＝一条天皇）にも聞しめして、あはれ、いかにものを思しつらむ、げにあるべくもあらず思ほしたりし御有様をと、あはれに悲しう思しめさる。宮たち（＝定子所生の脩子内親王、敦康親王）いと幼きさまにて、いかにと、尽きせず思し嘆かせたまふ。（①

三三七頁二行）

定子に対し、義子や元子らほかの妃よりも寵愛が深かった一条天皇の悲しみは計り知れないことをこの記述は伝える。また定子が日ごろから自分の死を悟つて、一条天皇に対し心細さばかりを口にしていたことを思い出し、定子の身を思いやつて嘆くなど、この場面から見ても定子の存在が一条天皇にとって特別なものであったことがうかがえる。

以下は伊周と女房らが、定子の遺した和歌（遺詠）を

見つける場面である（第四章参照）。

宮（＝定子）は御手習をせさせたまひて、御帳の紐に結びつけさせたまへりけるを、今ぞ帥殿、御方々など取りて見たまひて、「このたびは限りのたびぞ。その後すべきやう」など書かせたまへり。いみじうあはれなる御手習どもの、内裏わたりの御覧じきこしめすやうなどやと思しけるにやとぞ見ゆる。

よもすがら契りしことを忘れずは恋ひん涙の色ぞゆかしき

また、

知る人もなき別れ路に今はとて心細くも急ぎたつかな

また、

煙とも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれとながめよ

など、あはれなる事ども多く書かせたまへり。

「この御言のやうにては、例の作法にてはあらでと思しめしけるなめり」とて、帥殿いそがせたまふ。

①三二八頁六行

定子は姝子内親王出産の直前、気が休まらず手習をしていたのである。^⑤一首目では後宮において唯一の支えで

あった一条天皇に自分の死後どれほど悲しんでくれるのかと語り掛け、二首目では死ぬことへの不安や心細さといった感情を詠んでいて、出産直前の定子の心細い心情をうかがうことができる。一方で三首目は、葬送についての遺言とも取れる歌で、死への覚悟を感じることができ^⑥る。『栄花物語』において死後に故人の残した和歌を見つけるといった場面は、女性の死の描写において定子以外には見られない。定子の遺詠について詳細に記述すること、『栄花物語』は定子の死の悲劇性をより強調しようとしたのではないかと考えられる。

以下は定子の葬送の場面である。

鳥辺野の南の方に、二町ばかりさりて、霊屋といふものを造りて、築土などつきて、ここにおはしませんとせさせたまふ。よろづいと所せき御装しさにおはしませば、事どもおのづからなべてにあらず思し掟てさせたまへり。かかることをも宮々の何とも思したらぬ御有様どももいといみじう悲しう見たてまつる。宮は今年ぞ二十五にならせたまうける。

①三二九頁七行

鳥辺野南方の二町ほど離れたところに遺体を納める霊屋を造って、格別の葬儀を行ったことが記されている。

ここで定子所生の脩子内親王や敦康親王はあまりに幼いため、母が亡くなったことを理解していない様子が悲しく思われると語られ、定子がわずか二十五歳という若さで薨去したということが強調されている。のこされた二人の子供の幼さを描くことで、定子の死の悲劇を語り、読者の同情を誘うような描写となっている。

その夜になりぬれば、黄金づくりの御糸毛の御車にておはしまさせたまふ。帥殿よりはじめ、さるべき殿ばらみな仕うまつらせたまへり。今宵しも雪いみじう降りて、おはしますべき屋もみな降り埋みたり。おはしまし着きて払はせたまひて、内の御しつらひあべき事どもせさせたまふ。やがて御車をかき下ろさせたまひて、それながらおはします。今はまかでたまふとて、殿ばら、明順、道順などいふ人々も、いみじう泣きまどふ。をりしも雪、片時におはし所も見えずなりぬれば、帥殿、

誰もみな消えのこるべき身ならねどゆき隠れぬる君ぞ悲しき

中納言、

白雪の降りつむ野辺は跡絶えていづくをはかと君をたづねむ

僧都の君、

故里にゆきも帰らで君とともに同じ野辺にてやがて消えなん

などのたまふも、いみじう悲し。今宵のこと絵にかせて人にも見せまほしうあはれなり。(①三三〇頁

三行)

黄金づくりの糸毛車に定子の遺体を乗せて運び、伊周をはじめとする縁故の者は皆参列したことが描かれている。葬送の日は雪が降りしきり、霊屋は雪に埋まるほどであったことが描かれている。霊屋に降りしきる雪を払い、定子を安置して退出する折、定子の叔父明順、道順などがこらえきれずに泣き崩れている様子が描かれる。

そして伊周、隆家、隆円の哀傷歌が記されている。伊周は、「雪に隠れていつてしまわれたあなた(定子)が悲しくしのばれる」と詠み、隆家は「雪の降り積もった野辺で何を標に宮(定子)を探せばよいだろうか」と詠み、隆円は「宮とともにこの野辺に雪とともに消えてしまいたい」といずれも雪を詠みこんでいる。定子がこの深い雪に消えていく悲しみを雪を用いて表現し、兄弟らの哀悼の情が表現されているのである。絵に描かせて人に見せたいほどの美しく感動的な情景であるという記述

から、葬送時のこの雪の記述が悲しみをより増幅していることがうかがえる。

一条天皇は葬送に参列できない身の上である。

内には、今宵ぞかしと思しめしやりて、よもすがら御殿籠らず思ほし明かさせたまひて、御袖の氷もところせく思しめされて、世の常の御有様ならば、霞まん野辺もながめさせたまふべきを、いかにせんとのみ思しめされて、

野辺までに心ばかりは通へどもわが行幸とも知らずやあるらん

などぞ思しめし明かしける。(①三三一頁七行)

今夜が葬送なのかと、定子を偲んで眠らずに夜を明かす様子が描かれている。通例の火葬であつたならば野辺送りの煙を眺めることができたのと思ひ、哀傷歌を詠む。「私の心は宮を慕つてゆくけれど、この雪の中の行幸とは気づかないだろう」と、天皇という身分のために葬送に加われないつらさとともに、その制約を超えてでも葬送に加わりたい心情を詠んでいる。この歌からも一条天皇の定子への深い愛情を読み取ることができよう。

『栄花物語』は単に定子の死の事実を伝えるだけでなく、その死を美しく描くことで、この一族に対する同情を表

現しているのではないだろうか。

第二節 長保年間への序章——高階貴子の

死——

定子の死の六年前、長徳二年（九九六）に定子の母高階貴子は病により死去する。その貴子の死について本節では論じていく。

高階貴子は、漢学の才高い大和守高階成忠女であり、貴子もまたその才を受け継ぎ、円融天皇の御代には掌侍として内裏に出仕し高内侍と呼ばれた。そののち道隆と結婚し、伊周ら三人の男と定子ら四人の女をもうけ道隆の北の方となつたことが巻第三「さまざまのよろこび」に描かれている。道隆が死に、伊周・隆家が長徳の変を起こすと、貴子は悲嘆にくれる。その様子は、巻第五「浦々の別れ」において伊周・隆家が配流される折、

宮の御前（＝定子）、母北の方（＝貴子）も続きたちたまへれば、近う御車寄せて乗らせたまふに、母北の方やがて御腰を抱きて續きて乗らせたまへば、
〈中略〉ただ山崎まで行かむ行かむと、ただ乘りに乗りたまへば、いかがはせん、ずちなくて御車引き出しつ。(①二五〇頁三行)

とあるように伊周の腰を抱いて離れず、山崎の地までついていくと離別を惜しむ様が描かれている。それを耳にした一条天皇と東三条院は哀れに思い、伊周を筑紫から播磨に、隆家を出雲から但馬にとどめおく宣旨を下した。貴子はそのような状況の中で失意のうちに死去する。貴子の死は以下のように描かれている。

かくいふほどに、神無月の二十日余りのほどに、京には母北の方うせたまひぬ。あはれに悲しう思しまどはせたまふ。二位（＝成忠）の命長さあはれに見えたり。されどそれはむげに老いはてて、たはやすくも動かねば、ただ明順、道順、信順などいふ人々、よろづに仕うまつり、後の御事ども例のさまにはあらで、桜本といふ所にてぞ、さるべき屋作りて、納めたてまつりける。あはれに悲しともおろかなり。

（①二六七頁一〇行）

長徳二年の十月二十日余り、貴子は死去したことが描かれている。貴子の父成忠が長命ゆえに娘に先立たれ嘆くことを大変痛ましいものであることを描写している。また高齢の成忠は動くこともままならないため、貴子の同腹の兄弟明順、道順、信順が葬送を執り行う様子を描く。

但馬には夜を昼にて人参りたれば、泣く泣く御衣など染めさせたまふ。〈中略〉筑紫の道は、今十余日といふにぞ参りつきたりける。あはれ、さればよ、よくこそ見たてまつり見えたてまつりにけれど、今ぞ思されける。御服など奉るとて、

そのをりに着てましものを藤衣やがてそれこそ別れなりけれ

とぞ独りごちたまひける。（①二六八頁二行）

右は、貴子の男伊周、隆家の配所へその死が伝えられる場面である。但馬にいる隆家は泣きながら衣を喪服に召しかえたことが描かれ、また筑紫にいる伊周がその死を知るのは十日も後のことであった。かつて配所を抜け出し、見舞いに訪れた際の貴子の様子からその死を予感していた伊周は、やはりそうだったのかと嘆き、衣を喪服に召しかえる。独り言のように貴子を悼んで「離別が死別になろうとは」と哀傷歌をよむ様子が描かれている。貴子の死の記述は、定子の死が七頁を費やして記述されているのに対し、わずか一頁ほどの短いものである。しかし『栄花物語』はその短い記述の中に、窮地に陥った一族と貴子の死や、近親者である父成忠や男伊周・隆家らの悲嘆を「あはれに悲し」（①二六八頁一行）いこと

としてみている。ちなみに「あはれに悲し」は、村上天皇崩御の際（①五九頁）や藤原兼家の死去の際（①一七三頁）などにおいても用いられている。この一族がたどっていく悲劇の運命の序章といふべきものが、すでに巻第七「とりべ野」の定子の死以前に『栄花物語』に置かれていることが分かるのである。

第三節 長保年間の終章——残された者たちの死——

定子の死後、中関白家にはその妹たちが残されていた。東宮居貞親王女御の原子、敦道親王妃の三女、一条天皇御匣殿別当の四女である。このうち三女については『栄花物語』においてほとんど記事がなく、敦道親王没後の動向も明らかでないため措くとして、東宮女御原子と御匣殿と呼ばれた四女の死の描写について本節では論じていく。

巻第七「とりべ野」の巻末において、藤原原子の死が描かれている。姉定子同様后がねとして育てられた原子は、巻第四「みはてぬゆめ」に「中姫君（＝原子）、十四五ばかりにならせたまひぬ。東宮（＝居貞親王）に参らせたまつりたまふ有様、はなばなとめでたし。（①一

九八頁一〇行）」とあるように東宮居貞親王の女御となる。しかし原子は、姉定子が一条天皇に寵愛され、三人の皇子子女を設けたのとは異なっていた。「東宮には宣耀殿（＝城子）のあまたの宮たちおはしまして御仲らひいと水漏るまじげなれば、淑景舎（＝原子）参りたまふこと難し。（①三三三頁一行）」とあるように居貞親王は藤原城子を寵愛し多くの御子をもうけていたため、原子が参内する余地はなかったことが描かれている。東宮には寵愛されず、父や兄といった有力な後見がない原子の死は以下のように描かれている。

あはれなる世にいかをしけん、八月二十余日に、聞けば淑景舎女御うせたまひぬとのしる。「あないみじ。こはいかなることにか。さることもよにあらじ。日ごろ悩みたまふとも聞えざりつるものを」などおぼつかながる人々多かるに、「まことなりけり。御鼻口より血あえさせたまひて、ただにはかにうせたまへるなり」と言ふ。あさましいみじとは世の常なり。世の中はかなしといふなかに、めづらかに心憂き御有様なり。（①三五八頁二行）

右には原子が八月二十日過ぎに死去したことを人々が噂する様子が描かれている。⁽⁸⁾その死の様子は、にわか

鼻や口から血を流しあつという間に亡くなるというものだった。あまりの突然の死に、世の中の人々は「宣耀殿ただにもあらずしたてまつらせたまへりければ、かくならせたまひぬる（①三五八頁一行）」や「御みづからはとかく思しよらせたまふべきにもあらず。少納言の乳母などやいかがありけん（①三五八頁二三行）」と病床にあった城子が突然快癒したことから城子方やその女房少納言が原子に対し、何か仕掛けたのではなどと口うるさく噂する様子も記される。

また伊周・隆家が「いと若き御身のかくなりたまひぬることを、帥殿も中納言殿もよにいみじきことに思し嘆けど（①三五八頁一五行）」と定子に引き続きまだ二十代前半の年若い妹を亡くしてしまった悲嘆が描かれている。若い女性が一入、また一人と死にゆく中関白家の悲劇を描こうとしているのではないだろうか。

東宮にもわざと深き御心ざしにもあらざりつれど、いつしか事もかなふをりしあらば、さやうにもあらせたてまつり、もの華やかにあらせたてまつらんと思しめしつるを、あはれに口惜しう恋しくぞ思ひきこえたまひける。〈中略〉御対面などこそたはやすからざりつれど、御心ざしは宣耀殿の御なずらひに

は思はされけるものをと、かへすがへすあはれに口惜しくこそとぞ。（①三五九頁一行）

右は原子が死去したことを聞きつけた居貞親王の悲嘆の様子である。先述のように原子をさほど寵愛していなかった居貞親王であったが、帝の位についたならば、しかるべき扱いをして故関白家の女にふさわしい扱いをするつもりでいたのにと残念に思う様子と同時に、死去してしまった原子を恋しく思う東宮の心情が描かれている。

最後に一条天皇の御匣殿の死について論じる。この女性、定子や原子の同母妹である。定子の死後は、巻第八「はつはな」に「故関白殿（＝道隆）の四の御方は、御匣殿とこそは聞こゆるを、この一の宮（＝敦康親王）の御事をよろづに聞えつけさせたまひしかば、ただこの宮の御母代によろづ後見きこえさせたまふ（①三六五頁一二行）」とあるように、定子所生の皇子女たちの母代わりであった。敦康親王と対面するために一条天皇が御匣殿のもとを訪れるうちに、御匣殿は寵愛されるようになる。そして「かくてあり渡るほどに、かの御匣殿はただにもあらずおはして、御心地なども悩ましう世とともに思されければ（①三六八頁一〇行）」とあるように一条天皇の御子を懐妊する。御匣殿は悪阻に苦しみ里に退出

することとなる。一条天皇がそれをしきりに心配する様子が描かれており、一条天皇の御匣殿に対する寵愛ぶりがうかがえる。

里にて宮々の御おぼつかなさ恋しさなどを思し乱るに、御心地もまことに苦しうせさせたまひて、起き臥し悩ませたまふ。帥殿（＝伊周）わが御もとに迎へたてまつらせたまひて、何ごともよろづに仕うまつりたまひにけれど、にはかに御心地重りて、五六日ありてうせたまひぬ。（①三六九頁四行）

御匣殿は、宮中に残してきた定子所生の脩子内親王、敦康親王、嬬子内親王が気がかりでたまらず心を乱す様子が描かれている。そのように氣を揉んだためか、ますます病状は重くなり、容体が急変し重体となって五、六日後死去したことが描かれている。御匣殿は后妃ではなく女官の身分であった。自らの後見も心もとなく、姉定子所生の皇子女もまた後見に乏しい。その皇子女たちを母のように案ずる御匣殿に『栄花物語』は、定子の晩年の様子を重ね合わせ、再び後見の重要性を語る。そこからこそ、この一族の悲劇の運命が表現されているのである。御年十七八ばかりにやおはしましつらん、御かたち心ざまいみじうつくしうをかしげにおはしまして、

故宮（＝定子）の御有様にも劣らず、（中略）またかうただにもおはせでさへと、さまざま帥殿も中納言殿（＝隆家）も思し嘆くこともおろかなりや、あはれに心憂し。内々の悲しさよりも、よその聞き耳を恥づかしう憂きことに思ほし忍ぶれど、かく本意なきことに、この殿の御有様をまづ人は聞えさすめり。内（＝一条天皇）には人知れずうちしをれさせたまひて、御心ざしありて思しめされけりと見るにつけても、いと口惜しう心憂し。（①三六八頁九行）

右は人々の悲嘆の様子である。わずか十七、八歳という若さで死去した御匣殿の死は大変痛ましいものであった。また伊周はこの御匣殿に一族の再興をかけていたのかもしれない。「帥殿などは、ただならんよりは御子生れたまはんもあしかるべきことかとは思ほして、よろづに祈らせたまふ。（①三六九頁三行）」とあるように、御子の誕生を期待していたともとれる記述がある。しかしこの御匣殿も若くして死に、一族の女性が次々に亡くなっていく様子が伊周や隆家の悲嘆によって表現されている。

以上、定子を中心とする女性たちの死を見てきた。

言うまでもないことではあるが、摂関政治では入内した娘ないし姉妹が後宮においての確固たる地位を得て帝・東宮の皇子を産むこと、そしてその後妃らを支える実家の後見というものが重要なものである。ところが定子は一条天皇の皇子を得るも二十五歳という若さで薨去し、原子は東宮居貞親王の寵愛を得ることができず二十二、三歳という若さで悲惨な死を迎え、御匣殿は一条天皇に寵愛され懷妊するも十七、八歳という若さで死去してしまう。

『栄花物語』は道隆の死、伊周・隆家の左遷からはじまる中関白家の凋落の有様をただ通史的に書き記すのではなく、貴子に始まる定子、原子、御匣殿の四人の女性の死という側面から中関白家の悲劇性を強調して描写したとみることができるのである。

『栄花物語』は、この悲哀に満ちた中関白家への哀悼を根底として描かれたもののではないだろうか。

第三章 万寿年間と女性の死

万寿年間は、巻第二十一「後くゐの大将」から巻第三十「つるのはやし」まで九巻もの長きにわたって描かれている。そのうち、巻第二十一「後くゐの大将」に藤原

教通室（藤原公任女、巻第二十五「みねの月」に藤原妹子、藤原寛子、巻第二十六「楚王のゆめ」に藤原嬉子、小左衛門、巻第二十七「ころものたま」に藤原長家室（藤原齊信女、小式部内侍、源顯基室（藤原実成女、藤原公信室（藤原正光女、巻第二十九「たまのかざり」に藤原妍子の計十人の女性の死が記述されている。これは、『栄花物語』において最も多い人数である。

道長は、万寿二年（一〇二五）に寛子、嬉子、万寿四年（一〇二七）に妍子の計三人もの女を亡くしている。

この三人の女性についてはほかと比較しても、かなり多くの頁数を費やしてその死が描かれている。なぜ『栄花物語』は道長の三人の女の死をそのように描写したのだろうか。この九巻にわたって描かれた万寿年間の記事は、第二章で論じた長保年間の記事同様、『栄花物語』にとって大きな意味があったのではなからうか。そこで、本章では万寿年間に描かれた女性の死に着目し、その死の描写が『栄花物語』においてどのような意図をもって描かれたか、道長周辺の女性を中心として考察していく。

第一節 藤原寛子の死

本節では藤原道長三女寛子の死について考察する。寛

子は、道長と源高明の女明子の間に産まれる。卷第十三「ゆふしで」において寛子は、東宮を辞し院号を賜った小一条院と結婚する。この婚姻で小一条院は道長の婿となったことで、盤石な後見を得た。小一条院は、親王時代からの妃であった顕光の女延子とは疎遠になり、「かの堀河の女御（＝延子）そのままに胸塞がりて、つゆ御湯をだに参らで臥したまへり。（②一二二頁六行）」とあるように、延子が悲嘆にくれる様子が描かれている。この延子は悲嘆にくれるあまり、卷第十六「もとのしづく」において失意のうちに死去し、引き続き父の顕光も死去する。のちにこの顕光・延子父子は、その恨みから寛子に死霊となって祟るのである。

寛子は卷第二十四「わかばえ」において、「この院の女御殿（＝寛子）も、いと苦しげにせさせたまひつつ、月日にそへて影のやうにのみなせたまへば（②四六一頁三行）」と、病に苦しむ様子が描かれている。さまざまな祈禱などを行うも効果はなく、ついに危篤となる。道長は東宮敦良親王の尚侍となっていた倫子方の女嬉子がお産前であるので、寛子の見舞いには訪れなかったことが記述されている。しかし、寛子がもう臨終の時であるので、小一条院は「七月八日、院（＝小一条院）より

殿の御前（＝道長）に、「今は限りにならせたまひにたり。今ひとたび見たてまつらんとなんのたまはする」（②四八〇頁六行）」と、道長に使いを出し、対面するように願う。道長は対面すると、「ただ影のやうにならせたまへるものから、御色の白くうるはしく光かにおはします。いと恐ろしく、それもいかにいかにと見たてまつらせたまふ。（②四八〇頁二行）」とあるように、やせ細り白く光って美しい顔色が恐ろしくも思える様子である寛子を目の当たりにし、「殿の御前は、あさましく、今まで見たてまつらざりけることと、せきあへず泣かせたまふ。（②四八〇頁一四行）」と、今まで病気の寛子を見舞わなかったことを後悔する様子が描かれている。さらに寛子は、「泣かせたまへるさまなれど、涙も出でさせたまはず。（②四八一頁六行）」と、泣いているが涙も出ないことが記述されており、このように涙が出ないのは死相とされていた。それでも臨終の様子の寛子の髪を尼剃にし、「かくは思ひたてまつりけんや。禿におはしまししをりは、尼そり、居丈にこそ見たてまつりしか。あはれに悲しきこと（②四八一頁一〇行）」と、寛子が幼い頃に髪が早く尼削や居丈になるのを期待していたのに、今臨終を迎え尼になるために髪を切ることとなったことを道

長が嘆く様子が描かれる。

また、「御物の怪どもいといみじう、「し得たり、し得たり」と、堀河大臣（＝顕光、女御（＝延子）、諸声に「今ぞ胸あく」と叫びののしりたまふ（②四八二頁三行）」と、寛子が臨終を迎えたことを、顕光と延子の物の怪が大声で叫び喜ぶ様子が描かれている。

道長は寛子を山井殿に残し帰宅するが、しきりに使いを出し寛子の容態をうかがう。しかし「暁方に、「ただ今なん果てさせたまひぬる」とある御消息を聞しめす御心のほど、思ひやりきこえさすべし。（②四八二頁一二行）」とあるように、寛子が明け方に死去したことが描かれている。寛子の死を受け周辺人物が嘆く様子が以下のように描かれている。

この殿ばら（＝頼宗、能信、長家）言ひつづけ泣かせたまふ。げにいとみじう見えさせたまふ。さてもあさましかりける堀河の大臣の女御の御有様かなと、殿も院も思しめせど、「後の悔」といふことのやうになん。（②四八二頁二三行）

同腹の兄弟は、いまわしい声を上げて泣き叫ぶ。また、道長と小一条院は、自分たちの行いのせいで寛子が死を迎えたことを、「後の悔」ということわざのようにどう

にもならないことだと後悔する様子が描かれている。

また、「尼上いと思し嘆けど、とかく暑きほどに、日ごろにならせたまはんもうたてあべければ、かく疾くと思すも、いとあはれなりなどもおろかにぞ。（②四八三頁八行）」とあるように、暑さで遺骸が腐乱することを懸念して死の二日後に葬送が行われることを、あまりにも早いと寛子の母明子が嘆く様子が描かれている。また葬送ののち、「尼上も、月ごろ御心ほれて、はかなき果物もきこしめさで、消え入り消え入りせさせたまへば、（②四八七頁二行）」とあるように、明子は放心状態となり、わずかな果物も口にせず、氣を失ったと描かれている。寛子の早すぎる死は、母である明子にそれほど衝撃を与えたことが描かれている。

寛子は数か月間病に苦しんだのち、年若くして死去したことが『栄花物語』には描かれている。同巻で母后城子が三月に薨去した際の小一条院の悲嘆が、この寛子の死の場面でも多く記述されている。母と妃を同年に亡くした小一条院の悲嘆は大きく、「別れにし春のかたみの藤衣たち重ね着るわれぞ悲しき（第四章参照）」と母と妃を偲ぶ哀傷歌をよんでいる。そのような小一条院の悲嘆を描くとともに、道長や明子の悲嘆もみられる。とく

に道長は寛子の病を見舞わなかったことに対し後悔する様子や、寛子の幼い頃を思い出し、寛子の死を切実に悲しむ様子が描かれている。栄華を築き極官を極めた道長でさえ、娘の死から逃れることはできなかった。『栄花物語』は人間の過酷な運命を、女性の死という側面から描いているのである。

第二節 藤原嬉子の死

第二節では、嬉子の死について考察していく。嬉子は道長と源倫子の末娘である。巻第十四「あさみどり」において寛仁二年（一〇一八）に姉威子の立后により、空いた尚侍に任官されたことが記されている。のちに巻第十六「もとのしづく」において治安元年（一〇二二）東宮敦良親王へ参入したことが記述される。このとき太皇太后には彰子が、皇太后には妍子が、中宮には威子がおり、倫子腹の娘たちが三后を占めていた。嬉子も三人の姉のように立后することを見越して参入したのだろう。

嬉子は巻第二十四「わかばえ」において、「督の殿（＝嬉子）のただにもおはしまさねば、いかにいかにと、いみじきことどもをぞせさせたまひける。（②四六一頁一四行）」とあるように懐妊したことが描かれている。しか

し巻第二十五「みねの月」において「督の殿、この赤裳瘡出でさせたまひて、いと苦しう思しめしたりとて、殿（＝道長）にはのしりたちて、いみじく思しあわてさせたまふ。（②四九〇頁一行）」と嬉子は懐妊中に赤裳瘡に罹り、道長がうろたえる様子が描かれている。幸い赤裳瘡は平癒したが、「堀河の大臣、女御、さしつづきてののしりたまふさま、いとうたて恐ろしうあやにくなり。（②四九三頁九行）」とあるように、嬉子の出産の際に顕光・延子父子の物の怪が再び現れ、嬉子を苦しめる様子が描かれている。

しかし嬉子は物の怪に打ち勝ち、無事に男御子（親仁親王）を出産したことが巻第二十六「楚王のゆめ」において描かれている。その出産を周囲の者が喜びめでたい記事が続くが、御湯殿の儀のち、「されど、それよな、え堪ふまじき心地のしはべるが、いとわりなきぞ（②五〇四頁一行）」とあるように、道長に対し体調不良を訴える。このち嬉子はわずか数日の間に弱っていき、臨終を迎える。その様子は以下のように描かれている。

いたう日ごろ弱らせたまへるに、御物の怪のとりつきたてまつりにければ、すべて御気色ことのほかにて、ものものはかばかしくのたまはず。堀河の大臣、

女御などの御霊、すべてゆゆしきことどもをぞ言ひつづけののしりたまふ。御帳の外に、御枕のそばの方にて、心誉僧都、権僧正など加持参らせたまふ。

《中略》さらにいと堪へがたげなる御気色にて、未の時ばかりなりぬ。《中略》世の中には、限りにゆゆしうさへ申すなれば、宮々（＝妍子、威子）の御使いしきりて、東宮（＝敦良親王）よりはた隙もなければども、御返りはかばかしく聞えさせたまはず。殿の御前（＝道長）御帳の内に、児をするやうにつと添ひ臥したまひて、泣く泣くかかへたてまつらせたまへり。おほかた誰も誰ものおぼゆる人なし。

通はせたまふ御声も、やがてうせもてゆくやうなり。《中略》酉の時ばかりに、すべてただ蚊の声ばかり弱らせたまふに、そこら満ちたる僧俗、上下、知るも知らぬもなく、願を立て額をつきののしる。《中略》そこの人の、同じ心に一心に念じたまつるほどは、さりとともそこそは見えさせたまへ。されどすべて限りになり果てさせたまひぬ。御年十九。あなみじ、あさましと思しめす。②五〇五頁一三行）嬉子は次第に弱つていき、顕光・延子父子の物の怪にとりつかれ、言葉もはっきりと発することができなくな

ったことが描かれている。僧侶が近くで加持祈祷や読經を行うも、嬉子の容態はさらに悪くなったことが記述される。またそのような様子から世間では嬉子がもう臨終を迎えているのではないかと噂するので、嬉子の姉である皇太后妍子や中宮威子は嬉子を案じて使いを頻繁によこす。東宮敦良親王からも絶え間なく使者が遣わされるが、このような大変な様子であるので返事もままならない。道長は子供を扱うように添い寝し、泣きながら嬉子の体を抱える。しかし、嬉子の声は次第に消えていき、酉の刻には蚊の鳴くような声になったことが描かれている。僧侶たちは身分の上下、親しい者もそうでない者も皆大声で加持祈祷するも、嬉子はわずか十九歳という若さで死去してしまったことが描かれる。

道長の動揺は、「殿の御前は、やがてさし退いて、あさましくて臥せさせたまひぬ。《中略》上の御前（＝倫子）は、ただ子持の御身に一つまろかれて臥させたまへり。②五〇七頁一〇行」と道長はその場から立ち去り臥せつてしまい、倫子は嬉子の遺体にすがりつき、丸く折り重なって臥す様子が描かれている。末娘の早すぎる死に二人は大きな衝撃を受けたことがうかがえる。また、「御髪のいとこちたう多かるを、《中略》いとおどろお

どろしう、寝させたまへるやうなるを、殿の御前、上の御前、今ぞ泣かせたまふ。(②五一〇頁二行)」と嬉子はまるで寝ただけであるようだと言く様子が描かれる。さらにこの嬉子の死が思いがけないことであつたことが、一月前に死去した異母姉の寛子の死と比較して以下のやうに描かれている。

山井の女御殿(＝寛子)は、さても月ごろさばかり悩ませたまひて、限り限りと見えさせたまへれば、ことわりにおはしますに、この御事ぞ、いとゆゆしう、思しもかけざりつることなるや。おもしろき桜の咲きととのほりたるが、にはかに風に残りなく散りぬるにぞ、いとよく似させたまへる。(②五一七頁一行)

寛子が数か月もの長きに渡り病を患い死去したのは道理あることであるが、嬉子が突然死去してしまつたことは忌まわしく思いがけないことであると、事の意外さを強調して描いている。その死がいかに突然の事であつたのかを『栄花物語』は描いているのである。

このやうに、『栄花物語』において道長はこの万寿二年、子に先立たれることを初めて体験したと描かれている。「殿の御前は、世の中を深く憂きものに思しめして、

「今は里住みさらにさらにふよう、山に住まん」とのたまはせて、(②五一九頁一〇行)」とあるやうに、嬉子の死を受けて道長は世の中の無常を悟り、隠棲まで考えたと言されてゐる。それほど年若い女の死が衝撃的なできごとであつたことを『栄花物語』は描いている。

第三節 藤原妍子の死

最後に、藤原妍子の死について考察していく。妍子は倫子腹の次女である。妍子は巻第九「いはかけ」において三条天皇に入内したことが記述されている。のちに巻第十「ひかけのかづら」において妍子は「二月十四日以后にゐさせたまひて、中宮と聞えさす。(①五〇三頁一〇行)」とあるやうに立后し中宮を号したことが記述されている。そして同巻において、「例せさせたまふこと、立ちぬる月、この月、さもあらで過ぎぬ。(①五一七頁一行)」とあるやうに、妍子は懐妊したことが記される。そして巻第十一「つばみ花」において出産するも、産まれたのは皇女であり、「殿の御前(＝道長)いと口惜しく思しめせど、(②二三頁五行)」とあるやうに道長が落胆する様子が描かれている。道長は結びつきの弱い三条天皇とのつながりを得るために妍子を入内させ皇子の誕生

を期待したが、産まれたのはこの皇女、禎子内親王のみで冷泉系の皇統との関係を築くことはできなかった。皇子二人を産み国母となった姉彰子とは違い、妍子は日陰の存在となる。

そして、「大宮の御前（＝妍子）あやしう悩ましう思されて、ともすればうち臥させたまふ。（③九三頁七行）」とあるように、妍子は卷第二十八「わかみづ」から発病し、長い間患っていた。

道長は、頻繁に妍子の居所である枇杷殿に赴き加持祈祷を行うも、一向に回復に向かわないことが描かれる。その後も妍子の病平癒を願って法華八講や維摩經供養を行うが、そのかいなく卷第二十九「たまのかざり」において妍子は臨終のときを迎えるのである。

十四日のつとめて、「いかで湯すこし浴みむ」と仰せらるれば、〈中略〉急ぎたちてまゐらせられたれば、〈中略〉日ごろの御座、御衣、みなとりやらせたまひて、あざやかなる御衣、御座などに臥させたまひて、「殿おはせよ」とあれば、かくと人参りて申せば、「湯にまかりおりたり。ただ今参る」と申させたまへるに、〈中略〉御湯帷子ならおはしましたるに、御気色の例ならずおはしませば、「やや、参

りはべり」と申させたまへば、御髪削ぐまねをせさせたまへば、「尼にならせたまはんとや」と申させたまへば、うなづかせたまふを、泣く泣くしたてまつらせたまふ。（③一二九頁一四行）

妍子は湯あみをし、道長を呼び出すと、臨終のときであるので髪を削いで尼にするようにと言う。死を覚悟し、湯あみをして身を清め着替えをして、尼となって死を迎える妍子の様子は、「御戒受けさせたまふに、「たもつ」とのたまはするほど、いとさはやかなり。（③一二三頁一行）」とあるように妍子は臨終に際し、何も思ひ残すことがない様子であった。一方で遅れてやってきた倫子は、そのような妍子の様子を受け、「上の御前も今ぞ渡らせたまへれど、御目もくれまどひて何ごととも御覧じわかず（③一二三頁二行）」と目がくらみ、状況を飲み込めないほど衝撃を受けている様子が描かれている。

うせもおはするままに、殿の御前、「あな悲しや。老いたる父母を置きて、いづちとおはしますぞや。御供に率ておはしませ」と、声をたてて泣かせたまふに、この里にまかでたりし人々も、いつのまにか参り集まりたりけん、いといみじう揺りみちたり。

三月八日より悩ませたまひて、万寿四年九月十四日

の申の時にうせさせたまひぬ。(③一三〇頁一四行)

こうして妍子は万寿四年(一〇二七)九月十四日に薨去したことが記述されている。長く悪い、死を覚悟していたこともあるだろう、その死の様子は潔いものであったと右にも描かれている。道長は息絶えていく妍子に対し、年老いた父母を残してどちらへ行かれるのかという悲痛な叫びをあげる。三人もの女を亡くした父道長の悲嘆というものを『栄花物語』は印象的に叙述する。また、以下のように、

殿の御前、御衣をひきのけつつ見たてまつらせたまひて、「そら」とこそおぼゆれ。やや」と申させたまひ、御数珠を押しもませたまひて、「仏の心憂くもおはしますかな。今まで生けさせたまひて、かかる目を見せさせたまふこと」と、言ひつづけ泣かせたまふとも世の常なり。上の御前、消え入りて臥させたまへり。(③一二三頁一四行)

と、妍子の死を受け、虚事としか思われないと嘆き、数珠を揉みながら仏に対し恨み言を言う様子が描かれる。仏教に深く帰依していた道長であるが、そのように仏に對し恨み言を言うほど妍子の死は道長に衝撃を与えたことがうかがえる。

そして「この宮の御事の後、いとど苦しいなりませられたまへれば、あはれに心細く思さる。(③一四三頁一三行)」とあるように、道長の病状は妍子の死により一段と重くなったと記されている。妍子の四十九日法要の後、「殿の御前、よろづをしきはめさせたまひて、いとど心のどかに、あはれに悲しう思さる。(③一四五頁一四行)」と、夜になってさらに病状が悪化し苦しむ様子が描かれている。このように道長は妍子の死に強い衝撃を受け、病状が悪化したことが『栄花物語』には描かれている。道長はその後、卷第三十「つるのはやし」において同じ万寿四年の十二月に死去するのである。

以上、万寿年間に死去した寛子、嬉子、妍子の三人の死について論じた。

寛子は東宮を辞退した小一条院を婿とすることで、小一条院に道長の後見を与える役割を果たした。嬉子は後朱雀天皇の第一皇子親仁親王出産直後に死去するも、その皇子がのちに後冷泉天皇となっている。妍子は冷泉系の皇統である三条天皇へ入内したものの皇子を産むことはできなかったが、中宮となっている。⁽¹⁰⁾つまりこの三人は、道長が栄華を築く上でそれぞれ一定の役目を果たし

ているのである。しかしながら、寛子は二十五歳、嬉子は十九歳、妍子は三十四歳で、おおむね年若くして死去したことが描かれている。第二章で述べた中関白家の三人の女たち——定子、原子、御匣殿が、その繁栄のための役目を果たせず若くして死去してしまったことと比較すると、同じく若くして死去した御堂関白家の寛子、嬉子、妍子は一応の役目を果たした上での死として描かれている。

とはいえ、寛子、嬉子、妍子という三人の御堂関白家の女は、両親よりも先に年若くして死を迎えることとなつてしまった。父道長や母明子、倫子がいかにその死に衝撃を受けたのかを、『栄花物語』は読者に訴えかけるように表現するのである。『栄花物語』は、栄華を極めた道長でさえ女らの死からは逃れられず、そうした人間の運命の厳しさ、過酷さというものを女性の死を通して描こうとしたのだと考えられる。

第四章 『栄花物語』の哀傷歌

『栄花物語』には、先述のように女性の死に関する記事が多く描かれる。その記事の中に少なからぬ数の哀傷歌が記され、哀悼の意をより一層強めているように見受

けられる。

哀傷歌について『和歌文学大辞典』には以下のように記されている。

哀傷歌（あいしやうか）〔歌学用語〕

知己の死を嘆き哀悼する和歌のこと。広義には人の死に関連する和歌全般をさす。『万葉集』においては、挽歌と称され（巻二・三）、死者を哀悼しその鎮魂を願う呪術的性格を残すものであったが、『古今集』以降においては、哀傷歌と称され、親しい人の死を哀悼する歌と、悲嘆する人を慰撫する内容の贈答歌を中心としている。平安中期以降、観念的な内容や釈教歌的な仏教的性格の強い歌や、出家に際しての感慨、無常観を詠んだ歌など多様性がみられるようになる。内容の性格から類型的な表現が多いが、『新古今集』哀傷部においては、独特の個性的な表現の歌（八〇一など）も見られる。勅撰集の部立においては、『古今集』巻一六から見え、以降『拾遺集』巻二〇、『後拾遺集』巻一〇（中略）の各集では、独立した部立として、賀部と対比的に位置づけられているがほかの勅撰集では、雑部にまとめられている⁽¹⁾。

吉田茂氏によれば、『栄花物語』の哀傷歌は、正統合わせた全四十巻において全体の歌数六三一首のうち一九七首である。⁽¹²⁾ そのうち女性の死にまつわる哀傷歌は私見によれば、正編に六三首、続編に二八首の合計九一首が数えられる。

『栄花物語』の女性の死の描写に『源氏物語』の影響があることは、加藤静子氏がはやく『「栄花物語」——源氏物語の影』において指摘されている。⁽¹³⁾ 加藤氏は、『源氏物語』の「葵」巻における葵上と『栄花物語』の巻第二十六「楚王のゆめ」の藤原嬉子の死についてその類似点を指摘された。二宮愛理氏は加藤氏の研究を踏まえて、巻第二十六「楚王の夢」における嬉子の葬送の描写について、『源氏物語』「葵」巻の影響を指摘し、『栄花物語』の意図を検討している。また同氏は、『源氏物語』の表現の典拠となった〈高唐賦〉、〈有所嗟〉という二つの漢詩を、『栄花物語』もまた摂取していることから、『源氏物語』という優れた作品の力を借りて嬉子への哀傷をより文学的に演出したのではないかと推測されている。⁽¹⁴⁾ また安藤靖治氏は、『源氏物語』の「葵」巻の葵上の死と『栄花物語』の巻第七「とりべ野」の藤原定子の死について、物語的顛末ないしは構想が酷似していると指摘

された。⁽¹⁵⁾ さらに瓦井裕子氏は、『源氏物語』の作者紫式部が仕えた藤原彰子の妹である藤原妍子への哀傷歌を手がかりにして、巻第二十九「たまのかざり」と『源氏物語』を比較し、妍子への哀傷歌はとりわけ葵上や紫上などへの哀傷歌を踏まえたものと捉えている。⁽¹⁶⁾ 右のように『源氏物語』との関係を指摘される『栄花物語』だが、哀傷歌に限れば網羅的な研究はいまだになされていない。⁽¹⁷⁾ そこで本章では、『栄花物語』の女性の死における哀傷歌について、『源氏物語』との関係という観点から検討してみたい。なお、『栄花物語』と比較する『源氏物語』の和歌については、哀傷歌に限らず『源氏物語』に含まれるすべての和歌を対象とすることとする。

第一節 『栄花物語』の哀傷歌一覧

先述のように『栄花物語』の女性の死を悼む場面には哀傷歌のあるものが多い。ここでは『栄花物語』の女性の死にまつわる哀傷歌を『和歌文学大辞典』の定義に基づき、近親者や主人の死を悼む歌、またそれを慰撫する歌を中心に一周忌の際の歌、故人を思い出して詠んだ歌などをも含め、本文中から抜き出した。そしてそれらに通し番号を付し、括弧内には詠者を記した。

正編

- 一、そのをりに着てましものを藤衣やがてそれこそ別れなりけれ（伊周）
- 二、よもすがら契りしことを忘れずは恋ひん涙の色ぞゆかしき（定子）
- 三、知る人もなき別れ路に今はとて心細くも急ぎたつかな（定子）
- 四、煙とも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれとながめよ（定子）
- 五、誰もみな消えのこるべき身ならねどゆき隠れぬる君ぞ悲しき（伊周）
- 六、白雪の降りつむ野辺は跡絶えていづくをはかと君をたづねむ（隆家）
- 七、故里にゆきも帰らで君とともに同じ野辺にてやがて消えなん（隆円）
- 八、野辺までに心ばかりは通へどもわが行幸とも知らずやあるらん（一条天皇）
- 九、同じごとくふぞつらき桜花今年の春は色変れかし（対の御方）
- 一〇、嵐吹く深山の里に君を置きて心もそらに今日はしぐれぬ（倫子）

- 一一、夢のうちの夢の宿りに宿りしてわが身は知らで人ぞ恋しき（長家）
- 一二、死ぬばかり恋しき人を恋ふるかな渡河にてもしも逢ふやと（長家）
- 一三、ちがへても君に見せばや見るほど泣く泣く覚むる夢の悲しさ（母北の方）
- 一四、別れ路はつひのことぞと思へどもおくれ先だつほどぞ悲しき（良経）
- 一五、露をだにあてじと思ひて朝夕にわが撫子の枯れにけるかな（公任）
- 一六、あだにかく落つと嘆きしむば玉の髪こそ長きかたみなりけれ（母尼上）
- 一七、明暮も見るべきものを玉匣ふたたび逢はん身にしあらねば（公任）
- 一八、しるくしも見えぬなりけり数知らず落つる涙の玉に紛ひて（舘子）
- 一九、別れにし人に代へても見てしがなほど経てかへる玉もありけり（母尼上）
- 二〇、見るごとに袖ぞぬれける泉河憂きこと聞きしわたりと思へば（定頼）
- 二一、妹背山よそに聞くだに露けきに子恋の森を思ひや

らなん（公任）

二二、ともし火の光はあまた見ゆれども小倉の山をひとり行くかな（教通室）

二三、ふるさとに君はいかにと待ち問はばいづれの山の雲とこたへん（公任）

二四、今はとて形見の衣ぬぎかへて色かはるべき心地こそせね（生子）

二五、思ひやれ胸やはあくる音高み霊の夜殿の戸を開ちしより（某命婦）

二六、煙せぬ深山おろしの悲しさに雲の林はたちやそひけん（相任）

二七、ありとてや人はとふらん送りおきし霊の夜殿にそひにしものを（中納言の君）

二八、月の影林の鳥の声ならで行きかふ人のなきぞ悲しき（読人しらず）

二九、夏の夜をわけしその夜も袖濡れき秋の草葉も露ぞこぼるる（読人しらず）

三〇、別れにし春のかたみの藤衣たち重ね着るわれぞ悲しき（小一条院）

三一、かの世にはわれよりほかの親やあらむさてだに思ふ人を聞かばや（道長）

三二、心だにこの世にかなふものならばますらんさまもゆきて見てまし（小式部の乳母）

三三、ほどもなく雲となりぬる君なれば昔の夢の心地こそすれ（読人しらず）

三四、人知れず心をのみぞ野べにやる花見む人もなき秋なれば（読人しらず）

三五、この秋は嵯峨野の花もかひぞなき君ひとりこそ心ゆきけれ（読人しらず）

三六、契りけん千代は涙の水底に枕ばかりや浮きて見ゆらん（進内侍）

三七、起き臥しの契りは絶えてつきせねば枕を浮くる涙なりけり（長家）

三八、悲しさをかつは思ひも慰めよ誰もつひにはとまるべき世か（東宮の若宮の乳母の小弁）

三九、慰むる方しなければ世の中の常なきことも知られざりけり（長家）

四〇、もろともにながめし人もわれもなき宿には月やひとりすむらん（長家）

四一、たち重ね見すべきさまも知らせねば鐘の音にてきつと知らなん（道長）

四二、われしあらばたしかに着せん心ざしいろいろ深き

花の袂は（院源）

四三、うき世なり思ひかけきや時の間も君にあひ見て過ぐすべしとは（長家）

四四、今日まではありとも人に知られじと涙に沈む身をば問ふらん（長家）

四五、とどめおきて誰をあはれと思ふらん子はまさりけり子はまさるらん（和泉式部）

四六、恋ひて泣く涙に影は見えぬるを中川までも何か渡らん（和泉式部）

四七、思ひきや夢のなかなる夢にてもかくよそよそにならんものとは（公信室）

四八、つてに聞くほどだに悲し思ひやれほのかに見えし夢の名残を（姫君）

四九、形見とて染めたる色の衣さへ落つる涙に朽ちぬべきかな（姫君）

五〇、藤衣かへすがへすも悲しきは涙のかかるみゆきなりけり（不明）

五一、花紅葉折りし袂を今はとて藤の衣を着るぞ悲しき（不明）

五二、君恋ふる涙の色はそのかみの別れの庭もかくやありけん（命婦の乳母）

五三、いにしへの別れの庭の涙にも身にしむことはなほぞまされる（弁の乳母）

五四、君が見し月ぞと思へどなくさまず別れし庭を憂しと思へば（典侍）

五五、ながめけん月の光をしるべにて闇をも照らす影と添ふらん（弁の乳母）

五六、立ちのぼる雲となりにし君ゆゑに月ぞうき世の影とのみ見る（中将の乳母）

五七、憂けれども見し面影の恋しさに今宵の月をあかず見るかな（五節の君）

五八、なとて君雲隠れけんかくばかりのどかにすめる月もある世に（五節の君）

五九、さやかなる月とはいさや見えわかずただかき曇る心地のみして（少将）

六〇、数ならぬ涙の露を添へてだに玉の飾りをまさんとぞ思ふ（和泉式部）

六一、別れにし魂は返すにかたけれど涙のみこそ袖にかかれる（赤染衛門）

六二、かけてだに思ひかけきや唐衣かたみに涙かけんものとは（典侍）

六三、花にのみ染めし袂をうちかへし涙のかかる色ぞ悲

しき（弁の乳母）

続編

六四、目の前にかく荒れ果つる伊勢の海をよその渚と思

ひけるかな（出羽弁）

六五、古の海人の住みけん伊勢の海もかかる渚はあらじ

とぞ思ふ（兼房）

六六、君がため年経て見えし火焚屋の今はわが身の胸を
焼くかな（肥後の命婦）

六七、いつくしき飾りと見えし火焚屋も今日は心を焦す

なりけり（出羽弁）

六八、いかにせん衛士の焚く火も消え果てて長き思ひに

燃えぬべき身を（斎院の小弁の命婦）

六九、木枯の風にまかする紅葉だにまだ散らぬにや人は

散りなん（斎院の小弁の命婦）

七〇、君まさぬ古き宮には涙河渡るばかりの瀬こそな

らめ（出羽弁）

七一、かくばかり涙の雨の日を経ればげに宮城野も海と

なるらん（宣旨の君）

七二、泣く涙雨雲霧りて降りにけり隙なく空も思ふなる
べし（源為善）

七三、悲しさぞいとど数添ふ天地も君を恋ふると見ゆる

けしきに（出羽弁か）

七四、紅葉葉の心ごころに散りぬともこのもとはなほ思

ひ出でなん（宣旨の君）

七五、紅葉葉のこのもとをだに頼まずば散るにもいとど

悲しからまし（出羽弁か）

七六、悲しきに添へてもものの悲しきは別れのうちの別

れなりけり（斎院の小弁の命婦）

七七、あまたさへ別れの道を知らましや君におくれぬわ

が身なりせば（出羽弁）

七八、見るままに夢幻の世の中はししの果てこそ悲しか

りけれ（出羽弁か）

七九、さもこそは君がまもりのうせぬともかくやはしし

の果てもあるべき（宣旨の君）

八〇、うきもののさすがに惜しき今年かな遙けさまさる

君が別れに（宣旨の君）

八一、悲しさはいとどぞまさる別れにし年にも今日は別

れと思へば（長家）

八二、春立つと聞くにもものの悲しきは今年の去年にな

ればなりけり（長家）

八三、あたらしき年に添へても変らねば恋ふる心ぞ形見

なりける（出羽弁）

八四、時雨する秋の深山の嵐にはよに大淀の船出せじかし（相模）

八五、まして人いかなることを思ふらん時雨だに知る今日のはれを（出羽弁）

八六、霧はれぬ秋の宮人あはれいかに時雨に袂濡れまざるらん（読人しらず）

八七、いかばかり君嘆くらん数ならぬ身だに知られし秋のあはれを（出雲）

八八、去年の今日別れし星も逢ひぬめりためしなき身ぞ悲しかりける（後朱雀天皇）

八九、秋くれば流れまされど天の河影だに見えぬ人ぞ悲しき（女房）

九〇、およびなく影も見ざりし月なれど雲隠るるは悲しかりけり（不明）

九一、しぐれつつ朽ちにし袖はいかがするあはれうかりし秋は来にけり（通俊）

『栄花物語』の女性の死にまつわる哀傷歌は以上の九一首である。一から六三の歌は正編、六四から九一の歌は続編の哀傷歌である。歌数が最も多いのは続編の藤原威子の二一首、次に正編の藤原妍子の一四首である。ま

た十首近い数の哀傷歌がある人物は、藤原嬉子（七首）、藤原定子（七首）、藤原公任女（七首）、藤原長家室（藤原斉信女（七首）などである。なお二、四の定子の遺詠は、『後拾遺和歌集』五三六、五三七、一二二一（異本歌）にも載せられている。

第二節 『栄花物語』の哀傷歌と『源氏物語』

第一節で述べたように、『栄花物語』の女性の死にまつわる哀傷歌は九一首存在している。本節では、『栄花物語』の女性の死にまつわる哀傷歌と『源氏物語』の歌とを比較し、両者のかかわりを検討していきたい。

『源氏物語』については『栄花物語』とかかわる歌をあげ、アルファベットの小文字を頭に付し、括弧内には巻名と詠者を記した。また両者で同じ語句がある場合には傍線を付して表した。なお、両者の比較や同時代の和歌との比較については、『新編国歌大観 DVD・ROM』版を用いた。

まず、『別れにし』という語句を考察する。『栄花物語』の哀傷歌において『別れにし』が使われた歌は一九、三〇、六一、八一の四首である。

一九、別れにし人に代へても見てしがなほど経てかへる
玉もありけり（母尼上）

三〇、別れにし春のかたみの藤衣たち重ね着るわれぞ悲
しき（小一寺院）

六一、別れにし魂は返すにかたけれど涙のみこそ袖にか
かれる（赤染衛門）

八一、悲しさはいとどぞまざる別れにし年にも今日は別
ると思へば（長家）

一九は公任女が死去した際に、姫君が生前に紛失して
いた数珠を見つけ、姫君を思い出し母尼上の詠んだ歌で
ある。娘と死別したことを〈別れにし〉と詠んでいる。

三〇は小一條院が女御寛子の死去した際に、同じ年の春
に死別した母皇后臈子の死を思い出し「母と死別した今
年の春」といった意味で〈別れにし〉と詠んでいる。六
一では、皇太后妍子の薨去時に赤染衛門がその死を悼ん
で詠んだ歌であるが、ここでは妍子と死別したことを
〈別れにし〉と詠んでいる。八一では、長家が姉中宮威
子が今年の九月に薨去したことを思い出し、中宮と死別
した今年を〈別れにし〉と詠んでいる。『栄花物語』で
は、以上の用例が見られるが、すべてが「死別」の意で
用いられている。

一方で『源氏物語』には以下のaの例がある。

a別れにし今日は来れども見し人にゆきあふほどをいつ
とたのまん（賢木）光源氏）

この歌は、光源氏が父桐壺院の御国忌に雪の情景を見
て、藤壺宮に贈った歌であるが、〈別れにし〉はここで
は「父桐壺院と死別した一年前」という意で用いられて
いる。このように、『栄花物語』と『源氏物語』で〈別
れにし〉はいずれも「死別」の意で用いられている。

ところで、右の『源氏物語』のaの歌に用いられてい
る語句「ゆきあふ」には「雪」が掛けられており、雪景
色の中で故人を偲んだ歌と解釈される。⁽¹⁸⁾地の文にも、
「霜月の朔日ごろ、御国忌なるに雪いたう降りたり。

（『源氏物語』②「二八頁一三行」）とあるように、雪がい
たく降り積もっていたことが記されている。これについ
て思い出されるのが、『栄花物語』の藤原定子の葬送の
場面である。雪が降りしきり、兄弟らや一条天皇が定子
を偲んで哀傷歌を詠んだ状況と共通するのである。『栄
花物語』の定子をめぐる哀傷歌の五、六、七、八には
〈別れにし〉という語は用いられないものの、いずれも
「死別」という状況で詠まれて、しかも「雪」という語
が四首ともに共通している。⁽¹⁹⁾ちなみに『源氏物語』には、

「総角」巻において薫が大君を偲んで、「恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なまし」とよむ場面があり、この哀傷歌においても、「死別」と雪というものがともに用いられているのである。

また、同時代の歌で〈別れにし〉が使用された歌を見ると、たとえば『赤染衛門集』の二八九番「別れにし人はいかなるほととぎすしでの山路の物がたりせよ」⁽²⁰⁾がある。死去した夫匡衡を思い出し、〈別れにし人〉はどこへ行ってしまったのだろうかとうと詠んでいる。ここでも〈別れにし〉は「死別」の意で用いられている。また『伊勢大輔集』一〇六番に「別れにしその日ばかりは返り来ていきもかへらぬ人ぞ悲しき」⁽²¹⁾があり、これは伊勢大輔が、夫成順の一周忌に故人を偲んで詠んだ歌である。こちらの〈別れにし〉も「死別」の意で用いられている。ところで『伊勢大輔集』一三八番には、「わかれにしそのひばかりはめぐりきてゆきもかへらぬ人ぞかなしき」⁽²²⁾の形も載せている。こちらは雪の意も含むようである。このように同時代の歌集の中には、「離別」のものもあるが、むしろ「死別」が多いようである。ただし同時代の歌には、『源氏物語』や『栄花物語』のように雪とともに用いられている例はそれほど多くないようである。

次に〈いまはとて〉という語句について考察する。

〈今はとて〉が用いられている『栄花物語』の哀傷歌は以下の三首である。

三、知る人もなき別れ路に今⁽²³⁾はとて心細くも急ぎたつかな（定子）

二四、今⁽²⁴⁾はとて形見の衣ぬぎかへて色かはるべき心地こそせね（生子）

五一、花紅葉折りし袂を今⁽²⁵⁾はとて藤の衣を着るぞ悲しき（不明）

『角川古語大辞典』によれば、「いまは」は以下のように記載されている。

いまは【今は】□「今はこれまで」などの気持で、別離や断念の際に発する語。〈中略〉□「名詞」臨終。死に臨む時。「いかにぞ、いまはと見はてつや（源氏・夕顔）」のように、人の死に際して□を用いることが多いために成立した語で、「いまはのとき」「今はのきは」「今はのきざみ」「今はのとちめ」のような形が多い。⁽²⁶⁾

三は、第二章で述べた藤原定子の遺詠である。一人寂しく死出の旅路へ旅立つことの心細さを詠んでおり、〈今⁽²⁷⁾はとて〉は「いまはこれまで」と臨終の意で用いら

れている。二四は、生子が母（教通室・公任女）の一周忌の際に詠んだ歌である。母を亡くして形見の衣すなわち喪服から平服に着替えることになるが、悲しみを引きずる生子の心情を表現しており、「この一周忌を最後として」という意で〈今はとて〉と詠んでいる。五一は、妍子の葬送の際によまれた歌である。行啓の際に華やかに着飾った当時と比較し、「葬送の今だからといって」藤の衣すなわち喪服を着る悲しさを歌に詠んでいる。

一方、『源氏物語』の例を見てみると、以下のb、cの二首が見られる。

b いまはとて燃えむ煙もむすほはれ絶えぬ思ひのなほや
残らむ（柏木）
c 今はとてあらしやはてん亡き人の心とどめし春の垣根

を（幻）光源氏

bは、柏木が自らの死を悟ってひそかに女房を介して女三宮へ贈った歌である。死を前に女三宮をあきらめきれない気持ちを詠んだ歌であり、「もうこの世の最期」という意で〈いまはとて〉と詠んでいる。cは、光源氏が二条院の紫上の形見の庭の紅梅を眺めながら故人を偲び、出家を意識する場面である。「いよいよ出家するとなれば」の意で用いられ、慣れ親しんだ邸との「離別」

を悲しむ。bは死を目前に詠んだ辞世の歌であり、cの歌も「離別」であるものの、「亡き人」という語句を用いていることからすれば、『和歌文学大辞典』の定義にかなっており二例とも哀傷歌であるといえる。

三とbは、自分の死を前に詠んだ歌であり、歌が詠まれた状況は共通している。

また、同時代の『赤染衛門集』四三番の「今はとてうき世をよそに見るまでも花橘はたのみておかん」の歌の〈今はとて〉も、命が今となつてはつまり限りとなつてはという意で用いられていて「死別」とみられる。『源氏物語』だけでなく、同時代の用例も〈今はとて〉を「死別」の意で用いており、いずれに基づいたかということは断定することが難しい。

次に〈おくれ先だつ〉という語句について考察する。

『栄花物語』には〈おくれ先だつ〉が使われている歌は以下の一四の一例のみである。

一四、別れ路はつひのことぞと思へどもおくれ先だつほどぞ悲しき（良経）

『角川古語大辞典』によれば〈おくれ先立つ〉は以下のように記載されている。

おくれさきだ・つ【後先立】（動詞タ行四段活用）

歌語。遍昭の「末の露もとのしづくや世の中のおくれ先だつためしなるらむ」が、公任によって『前五番歌合』に選ばれ、『和漢朗詠集』『古今六帖』などにも採られて普及した。『源氏物語』にもこの語が散文の中に融化したと見なすべき用例が多数見いだされる。「後先になる」という①の意味から転じて②が生じるが、この両義の融合に歌語としての正統ないし成熟を認め得る。①遅れたり、先になつたりする。②物事に後先があるように、人の死に後先がある。先に死んだり、後に死んだりしていずれ死ぬ。⁽²⁵⁾

一四は、長家室である藤原行成女が病により死去した際に、兄良経が詠んだ歌である。長家は、室を偲んで眠った夜の夢に室が現れたので一一、一二の歌を詠んだ。

その夢を室の母北の方（行成室）は長家から聞き、娘を偲んで一三を返す。一四はさらにそれを聞いて、良経が妹との死別を悲嘆し詠んだ歌である。一四では、（おくれ先だつ）は年若い妹が死に、年を取った私（兄良経）や母上が後に残っているといった意で用いられている。この語句は『角川古語大辞典』にあるように、遍昭の歌

などを踏まえてよまれたものである。この遍昭の歌は、草葉の露を人の命の儚さに引き比べて無常を詠んだものである。この（おくれ先だつ）が用いられた歌は『源氏物語』には以下のdの例がみられる。

d ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな（御法）光源氏

これは病に臥す紫上を養女である明石中宮と光源氏が訪れる場面に詠まれた歌である。明石中宮の訪問で小康状態になつたことを光源氏は喜ぶが紫上は悲しい気持ちになり、「おく」と見るほどはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露」と詠み、その返しとして光源氏が詠んだ歌である。この歌は紫上の死の直前に詠んだ歌であり哀傷歌である。dでは（おくれ先だつ）は、「私（光源氏）が先に死ぬか紫の上が先に死ぬか」という意で用いられている。dも一四と同様人の命の儚さを詠んだものであり、両者の（おくれ先だつ）は似た意で用いられたものと考えられる。

また、同時代の『和泉式部集』三六〇番の「岸の上の露は残れど人の身は後れ先だつ程だにぞ経ぬ」⁽²⁶⁾も菊の花は長く咲き残るが人は次々と亡くなる儚さというものを詠んでおり、（おくれ先だつ）は、一四やdと同様の意

で詠まれている。このように同時代の用例も〈おくれ先だつ〉を同様の意でもちいられており、『源氏物語』の影響とは決めがたい。

以上、『栄花物語』の女性の死にまつわる哀傷歌の〈別れにし〉、〈今はとて〉、〈おくれ先だつ〉という三つの語句について、『源氏物語』との関連を見てきた。同時代の歌の影響も考慮する必要があるが、これら三つの語句は『栄花物語』と『源氏物語』とで同じような使われ方をしていることがうかがえた。とりわけ『栄花物語』の定子の死に際しての「死別」と「雪」という状況が、『源氏物語』「賢木」巻における桐壺院の御国忌の際と似ていることを指摘した。『栄花物語』に対する『源氏物語』の影響については、先行研究ですでに語られているが、哀傷歌への『源氏物語』の影響についての研究はまだ多くの研究があるわけではない。今回はわずか三例を検討したに過ぎず、今後さらに細かく見ていく必要があるだろう。

結章

『栄花物語』に描かれる宮廷女性たちの死の様相を眺

めてきた。

第一章では、『栄花物語』における女性の死の全体像を表にして表した。一覧を見ると、長保年間および万寿年間に死の記事が集中していることが分かった。

それを踏まえ、第二章では、長保年間に薨去した藤原定子とその周辺の女性の死の描写について考察した。長保年間の記述には、主に定子、その妹の原子、御匣殿などの中関白家の女性の死が描かれている。一族の期待を背負って入内したものの、定子は一条天皇の三人目の御子を出産後薨去し、原子は東宮居貞親王の寵愛を得ることもできず突然死し、御匣殿は一条天皇の寵愛を受け懷孕するも出産を迎えることなく病により死去する。このように、中関白家の女性は若くして死去していることが描かれている。『栄花物語』は、道隆の死や伊周・隆家らの左遷から始まる中関白家の凋落の有様を、これらの女性の死や伊周・隆家の悲嘆から描こうとしたのではないかと考察した。

第三章では、万寿年間の女性の死について、寛子、嬉子、妍子ら道長の女の死を考察した。ここでは若くして死去した女の死を、父道長や母明子、倫子の悲嘆する様子から、『栄花物語』は、栄華を極めた道長でさえも

「死」という運命の厳しさにはあらがえないことを描いているのではないかと考察した。

中関白家については、その凋落の有様を、御堂関白家については道長の晩年の悲しみというものを女性の死という側面から描こうとしたと考える。それらは、死去した女性らの様相や周辺人物の悲嘆をもって語られるのである。

また第四章では、女性の死にまつわる哀傷歌の〈別れにし〉(今とはとて、〈おくれ先だつ〉)という三つの語句について『源氏物語』との関連を考察した。これらの三つの語句は、『栄花物語』と『源氏物語』とで同じような使われ方がなされていることがうかがえた。しかし、同時代の歌集などとの関連も含め、さらに詳細に検討していく必要があるだろう。

今後は、女性の死というものが『栄花物語』にとつてどのような役割を持っていたのか、さらに深く追究する必要があるだろう。哀傷歌については、今回の検討は三語のみにとどまったが、そのほかの語句についても考察を進めねばならない。さらには『源氏物語』の和歌のみでなく地の文にも研究を広げると考える。また、今回あまり触れていないが哀傷歌を多く詠まれた女

性の死についても今後の検討課題としたい。

注

- (1) 『日本古典文学大辞典 第一巻』(岩波書店、一九八七年)
- (2) 加納重文『歴史物語の思想』(京都女子大学、一九九二年) 初稿「歴史物語」(『中古日本文学史』所収、有斐閣、一九七九年)
- (3) 福長進『歴史物語の創造』(笠間書院、二〇一一年) 初稿「源氏物語」はなぜ歴史を生んだか(『国文学』第四十二号、一九九七年)
- (4) 加納重文『歴史物語の思想』(京都女子大学、一九九二年) 初稿「栄花物語の性格」(『国語国文』四五卷九号、一九七六年)
- (5) 御前(＝定子) 一人の御心には思ほしまぎることな
くて、はかなく御手習などせさせたまひつつも、あはれ
なる事どもをのみ書きつけさせたまふ。(①三三四頁五
行)
- (6) 引用の底本(①三三九頁)の頭注一二に「この当時は火
葬が通例。定子が土葬を願った思想的根拠は明らかでない。
(後略)」と記されている。
- (7) 中納言(＝隆家)、宮(＝定子)の御有様も思しやり、
かの母北の方(＝貴子)をも思しやらせたまふに、いみ
じくて、女院(＝詮子)も内(＝一条天皇)も、遙かな
る御有様をいと心苦しう思しめして、大殿(＝道長)

にも「なほ、ことよろしかるべく」など院（＝詮子）に切に申させたまひて、帥殿は播磨に、中納言殿は但馬にとどまりたまふべき宣旨下りぬ。（①二五三頁一〇行）

（8） ただし原子の実際の死は、『権記』長保四年八月三日条に「三日丙寅 臨昏為文朝臣來、告淑景舍君於東三條東對御曹司頓滅云々、聞悲無極」（増補史料大成 権記一『臨川書店、一九六五年』）とあるように八月三日のことである。

（9） 卷第八「はつはな」における年次によれば、御匣殿の死は寛弘元年のことである。しかし『権記』長保四年六月三日条に「三日丁卯 昨今物忌、故関白殿四君亡給」（増補史料大成 権記二『臨川書店、一九六五年』）とあるように、実際の御匣殿の死は原子の死の二か月前で、長保四年六月三日のことである。

（10） 「かくて后三人おはしますことを、世にめづらしきことにて、殿（＝道長）の御幸ひ、この世はことに見えさせたまふ。この御前たち（＝彰子、妍子、威子）のおはしまし集まらせたまへるをりは、ただ今も見知り、古のことおぼえたらんに、物の狭間よりかいはませたてまつらばやとまでぞ、思されける。（②一五六頁一一行）」とあるように、『栄花物語』は一家に三人の后が立つこととなったことを「御幸ひ」であるとしている。

（11） 『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、一九九〇年）による。

（12） 山中裕編『栄花物語の新研究…歴史と物語を考える』（新典社、二〇〇七年）所収、吉田茂『栄花物語』の

和歌・引歌考」

（13） 加藤静子『「栄花物語」——源氏物語の影』（『国文学解釈と鑑賞』五四・三、至文堂、一九八九年）

（14） 二宮愛理『「栄花物語」「楚王の夢」における雲と霧の哀傷』（『西日本国語国文学』第三号、二〇一六年七月）

（15） 安藤靖治「中関白家鎮魂譜（抄）——諸書に描かれる、主としての伊周・定子像の位相から——」（『麗澤大学紀要』第八十一巻、二〇〇五年十二月）

（16） 瓦井裕子「藤原妍子周辺の女房と『源氏物語』（『詞林』第六十一号、二〇一七年四月）

（17） 『「栄花物語」』における哀傷歌についての研究は、注（16）のほかに、山川宏之『「栄花物語」正編における非御堂関白系哀傷歌の存在意義——小野宮家関連哀傷歌を中心に』（『二松』第一四号、二〇〇〇年三月）、佐藤正彦『「栄花物語」哀傷歌と勅撰集』（『立正大学国語国文』第四十一巻、二〇〇三年三月）などがある。

（18） 『源氏物語②』（二九頁）の頭注一四に「見し人」は故桐壺院。折からの「雪」をかけた「ゆ（行）きあふ」は、来世での再会の意で、「別れにし」と照応。再会しようもない死別を悲嘆する歌である。」と記されている。

（19） 哀傷歌八については、引用の底本（①三三一頁）の頭注一三に「行幸」に「深雪」を掛ける。」とあるように、この歌も「死別」と「雪」とをともに歌に詠みこんでいる。

（20） 関根慶子・阿部俊子校注・訳『私家集全釈叢書一 赤

染衛門集全釈』(風間書房、一九八六年)による。

(21) 久保木哲夫校注・訳『私家集注釈叢刊二 伊勢大輔集注釈』(日本古典文学会、一九九二年)による。

(22) 『新編国歌大観DVD-ROM』(角川学芸出版、二〇一二年) 所収本による。

(23) 中村幸彦ほか編『角川古語大辞典 第一巻』(角川書店、一九八二年)

(24) 注(20)に同じ。

(25) 注(23)に同じ。

(26) 佐伯梅友校注・訳『和泉式部集全釈』(東寶書房、一九五九年)による。

参考文献

中村幸彦ほか編『角川古語大辞典 第一巻』(角川書店、一九八二年)

『日本古典文学大辞典 第一巻』(岩波書店、一九八七年)

『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、一九九〇年)

松村博司『栄花物語の研究』(刀江書院、一九五六年)

松村博司『栄花物語の研究 続篇』(刀江書院、一九六〇年)

佐伯梅友校注・訳『和泉式部集全釈』(東寶書房、一九五九年)

『増補史料大成 権記一』(臨川書店、一九六五年)

山中裕『歴史物語成立序説』(東京大学出版会、一九六二年)

花物語上、下』(岩波書店、一九六四年)

松村博司『栄花物語の研究・第三』(桜楓社、一九六七年)

松村博司『栄花物語全注釈』(角川書店、一九六九～八一年)

山中裕『平安時代の年中行事』(塙書房、一九七二年)

山中裕『東大人文科学研究叢書 平安人物志』(東京大学出版会、一九七四年)

山中裕『平安文学の史的研究』(吉川弘文館、一九七四年)

山中裕編『平安時代の歴史と文学 文学編』(吉川弘文館、一九八一年)

山中裕編『平安時代の歴史と文学 歴史編』(吉川弘文館、一九八一年)

河北騰『歴史物語論考』(笠間書院、一九八六年)

関根慶子・阿部俊子校注・訳『私家集全釈叢書一 赤染衛門集全釈』(風間書房、一九八六年)

山中裕編『王朝物語の世界』(吉川弘文館、一九九一年)

河北騰『歴史物語の世界』(風間書房、一九九二年)

久保木哲夫校注・訳『私家集注釈叢刊二 伊勢大輔集注釈』(日本古典文学会、一九九二年)

加納重文『歴史物語の思想』(京都女子大学、一九九二年)

『和漢比較文学叢書 第十二巻 源氏物語と漢文学』(汲古書院、一九九三年)

源氏物語』(小学館、一九九四～一九八九年)

橘健二・加藤静子校注・訳『新編日本古典文学全集三四

大鏡』(小学館、一九九六年)

『歴史物語講座』第二巻 栄花物語』(風間書房、一九九七

年)

『歴史物語講座』第一巻 総論編』(風間書房、一九九八

年)

山中裕編『新 栄花物語研究』(風間書房、二〇〇二年)

山中裕編『栄花物語の新研究——歴史と物語を考える』

(新典社、二〇〇七年)

瀧浪貞子編『歴史と古典 源氏物語を読む』(吉川弘文館、

二〇〇八年)

加藤静子『王朝歴史物語の方法と享受』(竹林舎、二〇一

一年)

福永進『歴史物語の創造』(笠間書院、二〇一一年)

『新編国歌大観DVD-ROM』(角川学芸出版、二〇一二

年)

山中裕『栄花物語・大鏡の研究』(思文閣出版、二〇一二

年)

渡瀬茂『栄花物語新致・思想・時間・機構』(和泉書院、

二〇一六年)

倉本一宏『ミネルヴァ日本評伝選 藤原伊周・隆家——禍

福は糾へる纏のごとし——』(ミネルヴァ書房、二〇一

七年)

加藤静子『『栄花物語』——源氏物語の影』(国文学 解

釈と鑑賞』五四・三、至文堂、一九八九年)

山川宏之『『栄花物語』 正編における非御堂関白系哀傷歌

の存在意義——小野宮家関連哀傷歌を中心に』(『二松』第

一四号、二〇〇〇年三月)

安藤靖治『『栄花物語小考』——巻七、定子・原子姉妹の

死をめぐる——』(『麗澤大学紀要』第七十三巻、二〇

〇一年十二月)

佐藤正彦『栄花物語哀傷歌と勅撰集』(『立正大学国語国

文』第四十一巻、二〇〇三年三月)

安藤靖治『中関白家鎮魂譜(抄)——諸書に描かれる、主

としての伊周・定子像の位相から——』(『麗澤大学紀

要』第八十一巻、二〇〇五年十二月)

赤間恵都子『『枕草子』の雪景色——作品生成の原風景

——』(『十文字学園女子大学紀要』第四十六集、二〇一

六年三月)

二宮愛理『『栄花物語』『楚王の夢』における雲と霧の哀

傷』(『西日本国語国文学』第三号、二〇一六年七月)

瓦井裕子『藤原妍子周辺の女房と『源氏物語』(『詞林』

第六十一号、二〇一七年四月)

(本学大学院修士課程)